

素心仁魂



なかむら建設株式会社



なかむら建設明和事務所外観



事務所側面



CLTを使用した玄関・ホール

宮大工から受け継ぐ 建設会社

なかむら建設株式会社は、初代より数えて3代目と4代目の兄弟が二人三脚で営む会社である。初代の宮大工(祖父)の弟子であった2代目(父)が1960年に会社を設立し、高度経済成長の波に乗り仕事を順調に拡大。しかし、1973年のオイルショックによる高度経済成長の終焉とともに、同社も赤字経営の

住まう人との対話を大切にした家づくりを追求するなかむら建設。神都・伊勢で、顧客主体の家づくりを続けている。



代表取締役会長 中村 貴司氏(3代目)〈左〉
代表取締役社長 中村 伸二氏(4代目)〈右〉

企業概要

所在地 本社事務所:伊勢市中須町609
TEL:0596-25-6363 FAX:0596-27-2263
明和事務所:多気郡明和町明星2968

設立 1960年(昭和35年)10月

資本金 2,000万円

従業員数 16名(2020年3月現在)

事業内容 木造建築(住宅・非住宅)、古民家改修、リフォーム

URL <http://nakamurakensetu.jp>

顧客ファーストからの 売上倍増

年が続くこととなった。大学卒業後、大手ゼネコンに勤めていた3代目・貴司氏が家業を手伝うため帰郷し目にしたのは、資金繰りに奔走する母の姿であった。自身も慣れない営業回りに四苦八苦する日々が続いた。

赤字脱出の転機となったのは、見積方法を見直したことだった。



「伊勢の家」～CLTを使用した日本初の住宅～

とばかりでとても大変だったがとても楽しかった」と貴司氏は振り返る。そして、同年12月にCLTを使用した日本初の住宅「伊勢の家」が完成した。

また、2016年には公益財団法人日本住宅・木材技術センターの「CLT活用建築物等実証事業」に採択され、助成金を受けて同社・明和事務所の建築実証を行った。この実証では一般的なCLTが90×210mm程度の厚みであるところ、60mmと薄型



熊野杉骨太の家

「当時はお客様の予算を超える見積りを平気で提示していた」と貴司氏。「顧客主体で見積を作るようになってからは成約率が上がった」と話す。町家の住宅、ハウスメーカーの下請けなど幅広く仕事をこなすことで業績は回復した。

バブル景気に入ると精力的な営業活動のこともあり住宅や店舗の受注が増えた。さらに1993年の式年遷宮の折には、テーマパークや世界祝祭祭博な

ど大型施設の建設ラッシュにもない多くの仕事を引き受けた。当時の完工高(売上高)はバブル前の倍となっていた。

木造建築の プロフェッショナル

しかし、バブル崩壊とともに仕事は激減。その頃、貴司氏の弟で4代目の伸二氏も家業を支えるため、勤務先の大阪から伊勢に戻ってきた。今後の会社の方向性について社内で話し合いを重ねた末、代々得手としてきた木造建築に特化することを決めた。「在来建築はもちろん、2×4住宅やログハウス、輸入住宅、木造3階建など木造建築には絶対的な自信があった」と貴司氏。

貴司氏が38歳で社長に就任し、「名前のある家づくり」プロジェクトを立ち上げた。お客様はなぜ家を建てるのか、どんな暮らしがしたいのか。それを一言に集約した看板(テーマ)を現場に掲げ、顧客とスタッフ、職人がテーマを共有し家をつくり上げていくプロジェクトである。

のパネル(MNパネル)を使用した。同パネルは実証で壁倍率(木造建築の壁の強度)5倍の耐力があると証明され、2018年12月に国土交通大臣認定を取得。一般的なCLTパネル工法に比べて複雑な構造計算等が不要なことから、一般住宅・低層の非住宅への普及を目指している。

CLTがもたらす効果

現在、同社は大学の研究室とCLT建築の調湿効果についてデータを蓄積している。CLT建築の明和事務所屋内に温湿度計を設置し、24時間数値を測定。測定データは温湿度計を通じて研究室に送信される。「事務所内は冬でも湿度が保たれ乾燥しないので、リップクリームを塗る回数が減った」と貴司氏は笑う。

CLT建築が今後の事業の柱になると考え、「CLT建築という条件下なら、どの会社にも負けない」と自信をみせる。名刺に「CLT担当」と刷り込むほど貴司氏がCLTを推進する理由は、従来の木造建築

顧客もわが家のつくり手になれるというコンセプトが受け入れられ、同社を代表する注文住宅となっている。

耐震改修で甦る古民家

近年、リノベーションを施した古民家が味わい深いと人気があるが、同社は「耐震なくして古民家改修はない」という考え。なかには築160年を経た江戸時代末期の古民家もある。耐震を施すため、骨組みだけになった家の大黒柱や梁には当時の匠の技を見ることができ、「160年前の棟梁と家主の会話が聞こえてくるよう」と貴司氏は微笑む。



「今甦る昭和の家」強く、

より多くの木材資源を用いるため、森林資源の循環利用、林業の持続的発展、CO₂削減及び固定化など環境保護に貢献できると考えるからである。「CLTの利用がSDGs(持続可能な開発目標)の取組につながることを広くPRしていきたい」と話す。

伊勢の地から文化発信

同社の社是は「素心仁魂」。常に素直な心で、仁(愛)を持ち、魂を込めて物づくりに励むという意味。

「顧客のこだわりをかたちにするために、スタッフや職人が施主の思いにしっかりと耳を傾け、同じくらいこだわりを持つ必要がある」と語るのは、現社長の伸二氏。「家族の趣味や理想の生活スタイルまでうかがうことで、例えば茶道や華道の教室が開ける家づくり、人が集い交流の輪が広がる家づくりといった提案をすることも可能」と話す。ゆくゆくは日本の文化を欧州など海外に発信すべく、海外支店を持ち、和室・茶室の建築なども手掛けたいと夢を語る。

美しく「プロジェクトは、自ら新たな事業に取り組み中小企業を対象とした「経営革新計画承認企業(2009年度三重県)」に選定されるなど評価を得ている。

CLTを使用した 日本初の住宅

同社の特徴的技術が「CLT(Cross Laminated Timber)建築」。1995年頃に欧州で開発された工法で、CLTとは木材板の層を各層で互いに直交するように積層接着した厚型パネルのことである。断熱性に優れ、大判のパネルとして利用することで高い耐震性を確保できる。

同社は2015年に初めてCLTの事務所の建築を受注した。CLT建築を手掛けたことはなかったが、「はい、喜んで」という心意気で引き受けたという。

その後、その建物を見た人からCLTを使用した住宅を受注した。当時CLTを使用した住宅は日本に例がなく、引き受けたものの「初めて経験するこ



伊勢市駅前の鳥居

神宮のお膝元・伊勢に代々生まれ育ち、郷土への愛着と誇りを持つ2人。遷宮が行われた2013年、伊勢市駅前広場に鳥居を建立したのは同社である。「昔、伊勢市駅前にあった大鳥居がなくなり寂しい思いをしていたので、どうしても伊勢の玄関口の鳥居建築に携わりたかった」と語る。

常に木に関わる事業にチャレンジしつづける、なかむら建設の仕事に今後も注目したい。
文Ⅱ会員事業部 鈴木理可